

聖書：ヨハネの黙示録 19：1～10

説教題：婚礼の時が来て

日時：2021年8月15日（朝拝）

17章から18章にかけて大淫婦・大バビロンのさばきに関する幻が示されました。大バビロンとは旧約聖書に出て来るバビロンがそうであったように、神を無視して自らの繁栄を誇り、自らに栄光を帰そうとするこの世の都市や人間中心の文化を指します。それが大淫婦とも呼ばれているのは、これが私たちを神への信仰から引き離し、誤った道へと誘惑する存在だからです。しかし神に逆らい、自らを誇る大バビロンがいつまでも栄えることはありません。歴史の最後において大バビロンには神の最終的さばきがくだります。そこで18章20節でこう言われました。「天よ、この都のことで喜べ。聖徒たちも使徒たちも預言者たちも喜べ。神があなたがたのために、この都をさばかれたのだから。」この呼びかけに対する応答が今日見る19章前半に記されています。何と言ってもここの特徴は「ハレルヤ」という神への賛美の言葉が繰り返して出て来ることです。意外や意外、新約聖書でハレルヤという言葉が出て来るのは実はここが初めてです。しかも4回出て来ます。このもとになっているヘブル語は旧約聖書、特に詩篇の中にしばしば出て来ます。「主を誉めよ」「主を賛美せよ」という意味です。

まず出て来るのは1節です。ヨハネはここで「大群衆の大きな声のようなもの」を聞きました。6節にも「大群衆の声のような」「大水のとどろきのような」「激しい雷鳴のような」ものを聞いたとあり、いずれも「ような」「ような」「ような」という言葉が繰り返されています。つまりこれはこの世の言葉では表現し切れない、それを超えるような、とてつもない大きな声だったということでしょう。それが天でこう言うのをまず聞きました。「ハレルヤ。救いと栄光と力は私たちの神のもの。」これはこの時まで救いと栄光と力は神のものとは思われない状況があったということを示しています。この世ではむしろ大バビロンに救いと栄光と力があるかのように思われた。それに対して神と神の民は弱く、小さく、無視できるような存在に思われた。しかし最後の日には神こそが救いと栄光と力を持つお方であることが示されるのです。それは特に神のさばきにおいて、大淫婦のさばきにおいて示されるというのが2節です。そのさばきは決して身勝手に不公平なものではありません。2節に「神のさばきは真実で正しいからである」とあります。神は「淫行で地を腐敗させた大淫婦をさばき」

ました。すなわち人々を神から引き離し、一層の墮落へと導いた彼女をさばかれた。また「ご自分のしもべたちの血の報復を彼女にされた」、すなわち神の民を不当に迫害した大バビロンに報復し、正義を実行された。ここに神の真実と正しさがはっきり示されたということです。

3 節でもう一度ハレルヤと賛美され、「彼女が焼かれる煙は、世々限りなく立ち上る」と言われています。これはこのさばきの永遠性・最終性を示しています。このさばきが覆ることはもうありません。4 節では 24 人の長老たちと 4 つの生き物も賛美します。彼らは 4～5 章で見た通り、御座の近くにある天使的存在と思われます。彼らはそこで絶えず礼拝していることが述べられていました。その彼らもここで神の民の賛美に心合わせて、アーメン、ハレルヤ！と言います。5 節ではさらに「御座から声が出て」とあります。これは誰の声なのでしょう。御座からとあるので、神またはキリストの声かと思いますが、続く言葉の中に「私たちの神を賛美せよ」とあるため、これは神またはキリストではなく、御座の近くにて仕える別の天使的存在であろうと考える人が多いようです。その声は「神のすべてのしもべたちよ、神を恐れる者たちよ、小さい者も大きい者も私たちの神を賛美せよ。」と呼びかけます。地上では小さい者、大きい者といった色々な区別また違いがありますが、天においてはそのような区別は大きな意味を持たず、彼らは一つとなって神を賛美するのです。

そしてもう 1 回、6 節に「ハレルヤ」が出て来ます。ここは以前見た 11 章 15 節と同様、ヘンデルのオラトリオ「メサイア」の中の有名なハレルヤコーラスの歌詞のもととなった言葉です。日本語では「全能の主おさめたまわん」となっていますが、英語の歌詞の方がよりこの 19 章 6 節に近いと言えます (Hallelujah, For the Lord God Omnipotent reigneth.) もちろんそれまでも神が主権者であり、全世界を導いて来られました。しかしその支配はサタンによって、また獣によって、また私たちの罪によって曇らされていました。しかしついに神のさばきが最終的になされて、神の御心が完全に行われる世界が実現します。もはや 6 章 10 節で見た「主よ、いつまでさばきを行われぬのですか」というような祈りはささげる必要がありません。ですから 18 章 20 節の「喜べ！」との呼びかけを受けて、神の民と天使たちはまるでここまで待っていたかのように、ここで「ハレルヤ！」を繰り返して大合唱しているのです。

さて以上のように、この日は大バビロンへのさばきが行われ、神の最終的支配が確

立する日ですが、単にそれだけの日ではありません。7 節に「私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう」とあり、その後に私たちがそうする新しい理由が示されています。それは「子羊の婚礼の時が来て、花嫁は用意ができたのだから」ということです。私たちは神である主、全能者が王となられたことを見て、心から賛美するのですが、何と私たちはその王の花嫁とされる！ということがここに言われています。これは旧約聖書から示されて来たことです。代表的な箇所としてホセア書 2 章 14 節にイスラエルを指して「それゆえ、見よ、わたしは彼女を誘い、荒野に連れて行って優しく彼女に語ろう」という主の言葉があり、その後の 19～20 節にこうあります。「わたしは永遠に、あなたと契りを結ぶ。義とさばきと、恵みとあわれみをもって、あなたと契りを結ぶ。真実をもって、あなたと契りを結ぶ。このとき、あなたは主を知る。」 また新約聖書でもエペソ人への手紙 5 章 25～27 節で、キリストと教会の関係が夫と妻の関係にたとえられています。その婚礼の時がいよいよ来た！とここで言われています。ここから分かることは、キリストと教会の結婚式はまだ行われていないということです。聖書を見るとユダヤでは結婚には 2 段階があり、最初の婚約中の二人も正式な夫また妻とされていたことが分かります。イエス様の誕生の時もヨセフとマリヤは婚約中でしたが、それぞれの夫また妻と言われています。そして婚約期間を経て結婚へと至ります。その結婚において、花嫁は自らの家で支度をし、その準備がなされたところへ花婿が到着します。そして花婿は花嫁を連れて自分の家に向かって行進し、二人の到着が合図となって、婚礼の祝いが数日間にわたって開かれます。ですからやがての主の再臨は、まさに花婿なるイエス様が花嫁なる教会を迎えるに来る日です。それまで花嫁なる教会は自分の準備をするのです。そいついにその用意ができた時、彼女が美しく飾られた時、花婿が来ます。そして婚礼の祝いが始まるのです。

8 節に「花嫁は、輝くきよい亜麻布をまとうことが許された。その亜麻布とは、聖徒たちの正しい行いである。」とされています。ある人はやがて花嫁としてキリストの前に立つ時に私たちが着るのはキリストの義の衣だと思っています。すなわち地上でイエス・キリストを信じた時に与えられる信仰義認の義のことです。ところがここに私たちがまとうのは「聖徒たちの正しい行いである」と書かれています。もしここに、その亜麻布は「キリストの正しい行いである」と書いてあれば納得します。ところがそうではなく、「聖徒たちの正しい行いである」とあります。となると私たちがやがてキリストの前に花嫁として立つために、私たちの正しい行いも必要になって来るということなのでしょう。

しかしこれは聖書の色々な箇所で行われています。エペソ人への手紙 2 章 8 節では「この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です。」とあり、次の 9 節に「行いによるものではありません」と行われています。ではクリスチャンに行いは不要かと言うと、聖書はそうは言っていない。次の 10 節で「実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。」と行われています。つまり神の恵みによる救いにあずかった人には、神が備えてくださった良い行いも、その後の生活において見られなければならないということになります。関連するみことばとしてヨハネの手紙第一 3 章 2 節に、やがて主にお会いする再臨の日についてこう行われています。「私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。」 私たちは神の恵みによって、その日、キリストに似た者とされています。しかし次の 3 節にこう行われています。「キリストにこの望みを置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします。」 ここに私たちはただ受け身であるのではなく、自らを清くするという積極的な私たちの取り組みが含まれることが示されています。今日見ている黙示録 19 章 7 節も、実は花嫁が自分で準備をしたという表現になっています。新改訳の「花嫁は用意ができたのだから」という訳を読むと、花嫁はただ座っていて、他の人に用意をしてもらったというニュアンスに読めなくもありませんが、原文は花嫁自身が自分の準備をしたという表現です（新共同訳：「花嫁は支度を整えた」）。整えるのは花嫁です。これはピリピ人への手紙 2 章 12 節の「恐れおののいて自分の救いを達成するよう努めなさい」というパウロの勧めと同じです。私たちが努めるのです。しかし次の 13 節に「神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です」とあり、そのように導いてくださるのは神であると述べられています。両方の節を読み比べて分かることは、より根本的にはこれは神の恵みのわざであるということです。今日見ている黙示録 19 章 8 節でも、私たちがやがて着る亜麻布について「聖徒たちの正しい行い」と言われつつも、2 行目にそれを「まとうことを許された」とあります。これは「与えられた」という意味の言葉です。つまりそれは神が信者たちの内に働いて「与えてくださった」と言えるものなのです。

この黙示録では、迫害の中でも妥協せず、死に至るまで忠実であれ！と語られて来

ました。困難の中でも信仰と忍耐によって、主を証しする歩みに励め！と。そのような彼らの歩みは、最後の日に輝く亜麻布となって彼らが着るものとなるのです。ここで聖徒たちの「行い」という言葉は原文で複数形ですから、その亜麻布は聖徒たちが示した数々の行いによって織り合わされていると考えられます。しかしそのように導いてくださったのは神様です。地上にある限り、私たちの行いは不完全なものでしかありませんが、それでも神は信仰によってなされたそれらの行いをキリストにあって聖めて受け入れてくださり、御前に覚えていてくださり、かの日には私たちを飾って輝くものとしてくださるのです。ですからこのようにしてくださる神の恵みに信頼しつつ一層正しい行いに励め！主に忠実な歩みに励め！とこの箇所は私たちを激励しているのでしょう。

続く9節で御使いは「子羊の婚宴に招かれている者たちは幸いだ、と書き記しなさい」と言います。注意深く読む人は、ここでイメージが変わったと思うかもしれません。「花嫁」のイメージから祝宴に招かれる「お客さん」の立場へ格下げされている、と。しかしこれは矛盾しているわけではありません。先には教会全体が集合体として一人の花嫁のイメージで語られました。しかしここではその婚宴に一人一人が招かれているという観点から語られています。私たちは確かにキリストの花嫁なる者たちですが、そういう者たちとして一人一人祝宴にあずかるということを押さえれば問題ありません。やがての御国が祝宴にたとえられることは旧約聖書から言われて来ました。イエス様もルカの福音書13章29節で「人々が東からも西からも、また南からも北からも来て、神の国で食卓に着きます」と言われました。かの日に私たちを待っているのは、このような幸いなのです。

最後の10節でヨハネは御使いの足元にひれ伏して礼拝しようとしています。あまりにもこの幻とそのメッセージが素晴らしかったからでしょう。しかし御使いは「いけません」と言います。「私はあなたや、イエスの証しを堅く保っている、あなたの兄弟たちと同じしもべです」と。そして「神を礼拝しなさい」と言います。その後「イエスの証しは預言の霊なのです」と言います。この最後の言葉は解釈の難しいところです。これはイエス様を証しすることが預言の核心であること、その中心エッセンスであると言っているように思われます。御使いはヨハネへのメッセージ（預言）において、まさにイエス様を証ししました。また同じしもべであるヨハネや他の兄弟たちも、イエスの証しを堅く保っているとここで言われ、またこれまでも主の証人である（11

章)と言われて来た通り、その働きの目的はイエス様を証しすることです。ですからそのイエス様から目を離して御使いを礼拝するようなことをしてはならない。焦点を当てるべき対象はイエス様であって、この方こそを拝まなければならないということでしょう。あるいはイエス様を通してご自身を現しておられる神こそを礼拝しなさいということなのでしょう。

以上、今日の箇所から私たちが学ぶことは、たとえ今困難の中にあっても、やがて子羊との婚礼の時が来る！ということです。その素晴らしい日に向けて花嫁は自らを整える。今、私たちが経験する色々な試練や苦難も、やがての日に向かって自らをきよめるための神の手段です。そしてやがての日に私たちは光り輝くきよい亜麻布を着る者とされ、主との婚礼の祝いへと進む者とされます。私たちはやがて全能の主が王となり、すべてを支配なさる姿を仰いで「ハレルヤ！」と心から賛美しますが、何とその日は私たちがその王の花嫁として迎えられる日でもあります。私たちはこの日を見つめて、主の証しを堅く保ち、自らを整える歩みへ進みたいと思います。そしてやがて婚礼の時が来て、私たちのために来てくださる花婿をお迎えし、その方と一つに結ばれて、永遠に主との愛の関係に生きる幸いへと入る神の民の歩みへ導かれたいと思います。